

## 平安朝漢文の自分語りをめぐって

高山 大毅

### 一、はじめに

日本漢文学研究は、「断代史」的な傾向が強く、江戸期の漢文学を専門とする書評者にとって、平安朝の漢文学は、系譜的な連続性のある自分の研究対象の源流というよりは、実のところ、異なる地域の文学に近い存在である。では、本書の研究が、自分の研究に関わりないように思われたかといえ、そうではない。他地域の文学との比較研究が重要な知見をもたらしてくれるのと同じように、平安朝と江戸期の漢文学の比較は知的刺戟に富んでいる。とりわけ文学研究の根幹に迫る『平安朝文人論』の議論は、江戸期を専門とする者が抱きがちな固定観念を揺るがすものであった。報告においては、本書の「公私」概念の用法について疑問を呈した上で、本書の議論の有する射程について論じた。

### 二、「公私」概念について

本書の文学史理解は、「公的」な漢文学の発達を基礎としながら、

「私的」な漢文学が発展していったという図式を描く。「公」「私」は本書を貫く鍵概念である。

ただし、本書において、「公」「私」概念は、「公(おおやけ)」「私(わたくし)」と読み仮名が振られることもあれば(六五頁)、*public*、*private*に引き付けて説明がなされることもある(六一頁)。これは、思想史研究者からすれば、戸惑いを覚える概念操作であろう。溝口雄三『中国の公と私』(研文出版、一九九五年)や、渡辺浩「「おおやけ」「わたくし」の語義——「公」「私」「*public*」「*private*」との比較において」(佐々木毅・金泰昌編『公と私の思想史』、公共哲学1、東京大学出版会、二〇〇一年所収)などで既に議論されているように、「おおやけ」／「わたくし」、「公」／「私」、「*public*」／*private*」の概念にはかなりの相違がある。「公」「私」という扱いの難しい概念に議論を集約しなかった方が、本書の議論は分かりやすかったかもしれない。

### 三、自分語りの文学について

本書の序文には、「本書『平安朝文人論』は、公共的な文章の専門家たる文人が、自己表現を発見し、それを開拓してゆく精神史を照射することを目的としたものである」とある(二二頁)。このような「自己表現」を重視する文学史理解を、「近代主義的」であり、また現在の研究動向からすれば「古い」ものである——と見なす批判があるかもしれない。

しかし、書評者は本書をこのような批判に回収することためらいを覚える。本書が論じているように、菅原道真「書齋記」・紀長谷雄「延喜以後詩序」・三好清行「詰眼文」といった「自己」を語ることに長けた諸作は『本朝文粹』にも採録されており、十一世紀においても高い評価を得ている。「自己」を語ることに興味を持つことは近現代特有ではないのであろう。「自己表現」の文学の出現は、「それに到達すればゴール」といった不可逆の画期的な出来事というわけではなく、文学史上で定期的起こる現象なのかもしれない。

別の観点からいえば、「自己」を語ることに関心が稀薄な文学も、同様に興隆と衰退を繰り返しているのかもしれない。現代文学の主要な関心が、「自己表現」にあるかといえば、そうではあるまい。共同性や表現の定型性を重視する文学こそが、むしろSNS時代のコミュニケーションには親和的であり、研究者もこのような「現代」の関心に規定されている可能性については自覚的であっても良いであらう。

歴史上、自分語りの文学が繰り返し出現したとしても、それらには様々な差異があろう。この問題を考える上で興味深いのは、紀長谷雄の「延喜以後詩序」である。本書は、長谷雄の文章について「誰

かの孤独は、文章に刻印されることでいつしか他の誰かに共感され、新たな文章が生まれる。このような書物を通じての作者と読者の孤独な連帯は、限りなく普遍的なもののように思われてくるのである」と述べる(一七五頁)。卓越した見解であらう。本書のいう「孤独な連帯」は、読者に対して打ち明け話を聞かせているような、「延喜以後詩序」の巧みな「語り」によって形成されるものであると思われる。「延喜以後詩序」だけでなく、「書齋記」・「詰眼文」も、三人称で語られる客観的な記録のような形式ではなく、心話文に近い独自の語りになっている(「詰眼文」は自問自答のように読者を他者に示そうとする類のものではなく、書き手の心の中の語りに読者を巧みに巻き込んでいくものであるように見える。このような書評者の見解の是非はともかくとして、他の地域・時代の自分語りの文学と平安朝のこれらの文章とを比較することは興味深いことであるに違いない。